

反畑誠一（たんばた・せいいち）先生



音楽評論家

上智大学文学部新聞学科卒。

女性誌副編集長を経て、1983 年より音楽評論活動に専従。一般紙音楽コラム「ヒットの周辺」は現在も執筆中で(時事通信配信)、31 年目になる。

ポピュラー音楽全般を視野に、メディアを主に執筆、コメント発信、出演等を継続している。

日本の音楽文化・産業に関する分析の第一人者。

この寄附講座には、2004 年度より関わり、2006 年度～2013 年度まで、立命館大学客員教授として年間を通じて講座の運営・教育に従事した。

立命館大学客員教授、(社)日本音楽著作権協会理事、日本レコード大賞常任実行委員長、(財)音楽産業・文化振興財団諮問委員

近著「ミック・ジャガーは保守主義者である!?(「正論」3月号)」

《講義概要》

音楽評論家であり立命館大学客員教授として昨年度の音楽関連団体共同寄附講座をコーディネートしていただいた反畑誠一氏が先人の偉業についての講義を行った。

講義ではまず、受講生より質問のあった「音楽評論家」に仕事について触れられ、音楽評論家・吉田秀和氏の「音楽の持つ魅力や深い洞察を優れた感覚的な言葉で表現」という言葉で「音楽評論家」を示し、また、ライブなど現場に足を運び、客席から表現者を観続け、自分の感性で音楽を伝えることが仕事であると示された。

音楽とは、娯楽であり趣味であり、文化の一部であると同時に文化そのものでもあるという丸山重雄氏の言葉を用い、時代とともに音楽が発展してきたと述べられた。

続いて「興業」と「エンタテインメント」について講義された。興業とは客を集め、入場料をとって演劇・音曲・相撲・映画・見世物等を催すことであると紹介され、狭い区画に大勢の人が集まるため、妨害に弱かったと話された。興業権とは権利ビジネスであり、公衆に対して興業を行う権利をさす。わが国の代表的な興業として歌舞伎・落語などを挙げ、人が大勢集まることで大衆文化が生まれた。

続いて日本のライブ・エンタテインメントについても触れられた。CD売上と異なり、ライブ事業は右肩上がりで売上が伸びており、「物の時代」から「心の時代」へと移行しつつあると言える。市場の拡大によりコンプライアンス・ TRANSPARENCY という責務が発生しており、特に透明性をいかに保つかが今後の課題といえる。

コンサート招聘には様々な流れがあり、特に海外のコンサートなどを招聘する場合は、契約に関わる点をしっかりと確認しなければ、後々金銭面のトラブルになる場合も可能性がある」と述べられた。

コンサート事業の法的環境として、コンサートチケット裏面に記載のある約款の存在と改定事項以外のほか、著作権使用料・インターネット上でのチケット・グッズ販売などを挙げられた。

最後に受講生に送る言葉として、国際的視野での思考・ニューメディアの産業構造に精通・新たなマーケティング手法の習得・関連法規の基礎知識の習得・専門領域を選択し才能を特化させ、感性を磨き、創造性が豊かであり、何よりも人間が好きであることが新世代のエンタテインメント産業人であると述べられ、講義を終了された。

